

2. 関係者談話

(1) 昭和30年代のまちづくりについて【開催：平成22年3月26日】

昭和30年(1955年)の1町3か村合併による守谷町誕生後、4自治体が一つの「町」としての意識を持って基盤を固めるという、守谷町草創期に当たる時期のまちづくりについて、当時助役としてご尽力された中村力氏から、インタビュー形式により様々な証言やご考察をいただいた。

インタビューは、鮎川芳治氏、高坂明夫氏を聞き手役として実施した。

■出席者及び経歴：

話し手：中村力氏（昭和33～44年守谷町助役、昭和51・53～59年守谷町議会議長
歴任）

聞き手：鮎川芳治氏（昭和35年守谷町役場入庁、国民健康保険課、税務課、議会
事務局、企画財政課等を経て助役にて退職）

高坂明夫氏（昭和34年守谷町役場入庁、農業委員会、教育委員会、都市
計画課、企画開発課等を経て総務部長にて退職）

本文中（*）の部分は巻末に用語解説あり

■1町3か村合併の経緯

聞き手 中村さん、昭和30年に1町3か村が合併して守谷町が誕生したわけですが、合併に至るまでの経緯はどのようなものでしたか。

中村 合併以前の状況ですが、戦後は全国的に、食糧問題、つまりどうやって食べていくかということが大きな命題となっていました。一方で義務教育年限の延長と、市町村ごとに新制中学校を開設するとされた教育制度改革も実施されましたから、自治体の収入と支出が非常に不均衡な状態になりました。ほかにも、社会福祉や保健衛生関係などの新しい事務も市町村ごとに実施することとなったため、自治体の規模を合理化し、無駄をなくして効率的な行政運営を可能とするよう合併すべきだろうと、昭和28年に町村合併促進法が制定され、いわゆる昭和の大合併が各県単位で進められることになったわけです。

守谷も合併の方向が示され、当初は稲戸井、下高井、菅生、小絹などを合併対象として想定していました。

しかし、当時の守谷はこの地域で行政の谷間にありました。戦後は食糧が基本でしたから、安定した田んぼを持っている自治体が豊かとされており、その点、守谷には山林はあったけれど、田んぼは天成の谷津田ばかりでしたから、近隣と比べると低い位置に見られていました。

ですから、菅生や小絹、稲戸井、下高井といった地区の中枢の人たちは、守谷よりも取手や水海道の方を評価していました。

もちろん、大井沢や菅生、赤法花、同地地区など、実際に隣接町村との際（きわ）に住む人たちは、自分たちの生活を中心に新しいまちづくりを考えていましたから、中枢の人とは違う考えを持っていました。このため、外交的には各町村同士で（交渉するなどの）つくろいはしましたが、最終

的には同地地区が下高井から分村して守谷に入ったほかは、菅生も小絹も守谷には入らないことになりました。

こうして大井沢、大野、高野、分村された同地を軸として新しい守谷町を作るようになったのですが、各地区が互いをどう思っているか、例えば大井沢に対する守谷、高野、大野の見方、守谷に対する高野、大井沢、大野の見方は違っていました。そういう隔たった思いを統一して合併を成し遂げるには、各町村のリーダーや議会中枢に、互いを理解するための努力が求められました。

例えば、大井沢は財政的に困っているという噂がありました。その理由として、当時の大井沢が、鬼怒川架橋の問題を行政の中心に据えて、財政を集中させていたことが挙げられます。また、戦後大井沢は独自に中学校を建設したこともあって、「大井沢は財政難に苦しんでいる。」などと周囲に思われていたのだと思います。

私は、大井沢は山林や田畑を含めて面積があり、非常に魅力がある地域であると思っていました。

聞き手 そうでしたね。合併前、高野、大野、守谷は1町2か村合同で組合立中学校（*）を開設しましたが、大井沢だけは独自に中学校を開設しました。

中村 そういう点では大井沢は潜在能力がありましたね。自前の中学校もあり、鬼怒川架橋もやりました。そのかわり財政的に破綻したとか言われることになりましたが。今の守谷市においても、過去の大井沢の財産が生きていると思います。

大野は国民健康保険制度を既に実施しており、村長の鈴木進さんという方は利根川に橋をかける構想も示しており、私の感覚ですが、他地区と比べて行政的に進んだ考えを持っているようでした。

高野は比較的温和な地域で、既に米麦中心の粗放農業ではなくて、軟弱野菜（*）を中心に、首都圏向けの農作物を作っていました。

聞き手 高野ではよく、原動機付自転車の前後によこだ籠（*）を付け、ほうれん草などの野菜を一杯積んで、取手から柏、松戸まで売りに行っていました。

中村 当時農作物を売るには、農協ルート、いわば公営のルートと、民間業者が買い取るルートとの、二つの販売ルートがありました。

農業の近代化も南の方から広がりましたね。

まず、高野で軟弱野菜の栽培が始まったころ、大井沢や大野の一部では葉タバコとかそんなものをしていました。それがだんだん後退して、全域的に野菜作りが入ってきて、現金収入の道が確立しました。籠を背負って東京へ売りに行ったり、あるいは柏方面から来る（野菜の）仲買人と接触したりして、日常消費する野菜を栽培・販売して現金収入の道を作ったの

です。そういった、季節的にしか金銭が得られない米麦栽培とは違う農業形態が、高野には早くから生まれており、暮らしに裕福さがありました。

では中心の守谷はどうかというと、関東鉄道があり、県道が真ん中を貫いており、それらが他地区と比較して位置的な誇りになっていたほか、将門城址などの歴史的史跡もあって守谷の評価が保たれていたように思います。

そのような状況の中、互いに互いを理解し合うため、幾度も会合を重ねて合併にたどり着きました。

聞き手 合併ですが、稲戸井や同地もという話がありました。同地の皆さんは最初から守谷に来たがったのでしょうか？
また、菅生の方々に対して、大井沢と一緒に守谷に（入ろう）という動きもあったと聞いていますが、菅生の人たちは守谷に来たがっていませんでしたか？

中村 そうですね、同地は初めから守谷に来たがっていました。
菅生地域も、一般の人たちは守谷に来たがっていましたが、村長や議員など中枢の人たちの考えは違っていました。特に議会を中心に、（守谷より）水海道を良しとする考えがあったように記憶しています。ですから、菅生は水海道と合併したのでしょう。
合併の経緯は、大雑把に言うところなものです。

聞き手 平成の合併のときには、新しいまちの名前や庁舎の場所などが大きな問題となっていたようですが、このときは（町の名前をどうするか）すんなり決まったのですか？

中村 いえ、守谷の「守谷」と、高野の「野」、大野の「野」で「守谷野」はどうかという話もありました。結局「守谷」で落ち着いたわけですが、これには大井沢の影響がありました。

大井沢はもともと守谷と良い関係ができており、一方大野は守谷に対抗意識を持っていました。人間それぞれ個性があるように、町村にも個性があって、相性も関係も違っていたのです。「守谷」という名前になったのは、議会の中で大井沢の人たちの（「守谷」にするよう発言してくれた）影響が大きかったからと言えますね。

聞き手 そんな状況の中、新しい守谷町の庁舎ができましたね。

中村 庁舎を移転することについては、かなり圧力がありましたね。大井沢地区の議員などからは、「とにかく現在の守谷庁舎からは一歩でも外してくれ、体面上、現在の庁舎では絶対にだめだ。」などとも言われました。そういうことで、仲町（現在保健センターがある場所）となりました。その前（の役場庁舎）は、今の商工会の事務所の位置にありました。

聞き手 場所の選定に当たっては、清水地区や仲町地区などの選択肢もありましたが、仲町に決定した経緯はどのようなものでしたか？

中村 中間的な場所という意味があったと思います。
最終的に決定するまで、ここへ、あそこへ、という選定作業をしていたのですが、あるとき、ここはどうだろうと提案されて、すっと決まったという感じです。
こうして、庁舎は仲町に決まりましたが、残りの駒が後日、別のところで生きてくることもあります。あのときは後になって（候補地の一つであった清水に）中学校が建設されました。

聞き手 合併後に初議会を行ったときは、議員数が60人と多いために、守谷倉庫(*)を解体して議場を作ったという話を聞いたことがあります。

中村 初議会の議場となったのは、当時の新町会館ですね。新町会館は、坂町にあった海老原会社(*)の女子寮を解体して造りました。

合併後は、各地区ともすぐに打ち解けました。
当時、議会が終わると皆でなじみのうなぎ料理屋に行って、お互いに一杯やったものです。意外とすぐになじみましたね。ちょうど中学校の組合議会というものがあって、これは議員選出で構成されていたので、話し合う機会も多く、そういうことから旧町村同士の関係もだんだん変わってきました。
合併というものは、やはり町村の成長を契機付けるものなのかなという気がしますね。合併したら合併したで意識を変えていくことが大事です。

■企業誘致と町の変化

聞き手 合併で意識が変わるということですが、そういう意味で、それまで経済の中心だった農業から工場の誘致へと、意識転換を図るに至った経緯は、どのようなものでしたか。

中村 当時、各町村ともそれまでの食糧自給体制の確立から、次の段階として生活向上のための金銭収入が必要となってきました。農業も、粗放農業から軟弱野菜生産に変わってきましたが、それでも限界があるので、各町村とも新しい財政基盤をどう作るかということで、企業誘致の傾向が出てきました。

この地域でそのきっかけを作ったのは、岩井町（当時）ですね。
昭和 34 年に当時岩井町長だった吉原三郎さんが、県や国の影響ではなく、自己判断で市内の土地を買い占め、そこへ企業（ビクター）誘致を行うという大胆な手段に出て、近隣の自治体は大きな衝撃を受けました。
このように、これからの町村運営のためには農業だけではだめだ、第二次、第三次産業を自ら確立しようという気運が、どこの町村にもありました。もちろん国の影響もありましたが。

守谷としてもそれに取り組むため、昭和 35 年に企業誘致促進奨励措置条例を制定し、町として企業を誘致する体制を整えて誘致活動を始めました。県の東京事務所を拠点にして、都内の会社を回ったものです。実現はしませんでした。が、神戸製鋼（株式会社神戸製鋼所）などへも行きました。そうしてまず最初に誘致できたのは、クレノートン（当時は株式会社呉製砥所）でした。当初クレノートンは、県の開発公社に藤代町を紹介されていました。しかし藤代町は洪水等の災害に遭いやすいという話があって、急きょ守谷になったという経緯があります。そこで、県の開発公社と協力して、用地買収を始めました。

聞き手 誘致活動の結果、企業誘致条例に基づいて町内に入ってきた企業は 3 社でした。なぜこの 3 社を選定したのですか。

中村 誘致条例の対象となったのは、クレノートンと明星（明星電気株式会社）、前川（株式会社前川製作所）の 3 社です。

なぜこの 3 社を選んだのかといいますと、町が一方的に選定したのではなく、交渉や調整をした結果、あの 3 社に決まったという感じですね。逆に、こちらで希望しても、あちら（企業）では気に入らない、そういうことがよくありました。

例えば、人的な問題、水や電気、交通問題など、そういったことは企業も進出するからには、企業なりに調査してきます。ですからこちらが希望しても、相手方が難色を示すことがありました。

特に茨城は（都内から企業を呼ぶには）利根川がネックでした。当時はまだ埼玉など、川を渡る必要のない用地もありましたからね。

ですから、もっとほかにも企業を選べなかったかという話もあるかもしれませんが、そういう企業には出くわさなかったですね。

聞き手 一番最初に誘致した企業はクレノートンでしたが、その用地買収や資金繰りで苦労したことはありますか？

中村 クレノートン誘致前には、あの付近にゴルフ場を造成しようという民間の計画がありました。このときは、実際に東京の不動産業者を呼んで事務所を建て、1 反で 6 万、8 万、9 万円と土地にランクを付けて用地買収に入るところまでいきました。

しかし、地権者の一部には、ゴルフ場は絶対賛成しないという方もおり、難航していました。そのようなときにクレノートンの案件が出てきたところ、企業なら良い、企業なら労働力も吸収できる働き口になるだろうという意見が出たため、町が県と組んで誘致することになったのです。

そして値段の問題ですが、当時は、永泉寺周辺の土地は 1 反（300 坪）で 3 万から 5 万円という価格でした。

クレノートン用地買収について検討するため地権者の方々が集まったとき、ある方が、「300 坪 20 万円ならどうだ」と言ったのです。後で、「これほどの値段ならまさか買わないだろうと思った。」と言っていました。

ところが、そのとき来ていたクレノートの買取担当者が、「20万円をいくらか下げてくれたら買います。」と提案しました。それで19万5千円という価格となり、地権者さんたちに伝えたところ、その値段では仕方ないということで多くの方の賛同をいただき、(誘致が)決まったという経緯があります。

しかし、誘致がほぼ決定した後も、地権者の中には、燃料や何かのために山は必要だ、残して欲しい(から反対だ)という方もいました。当時はまだ、燃料として山の木々は重要なもので、その意識も高かったですからね。そういう方たちには、町職員と県の開発公社職員と一緒に、泊り込みで交渉して、買い上げに成功しました。ただ、クレノートの社長は、買取の値段が高すぎて、あまり心良しとはしていなかったようです。

聞き手 クレノートの地権者は何人くらいでしたか？

中村 どれくらいだったか正確には覚えていませんが、かなりの方がお持ちだったと思います。

聞き手 クレノートが買取した土地ですが、谷津田部分が(買取されずに)少し残ったりしましたが、そういった土地が残ったのには理由があるのですか？ 買ったのは山林だけだったのですか？

中村 やはり田んぼは農地法の制約がありましたから。それが(買取されなかった)理由だったと記憶しています。

聞き手 当時は都市計画法も旧法でしたから、現在の開発行為制度もありませんでしたよね。そういった時代、地主さんと企業がうまくいけば、買取はそれほど苦労しないものだったのですか？

中村 そうでしたね。たとえば、明星(明星電気株式会社)の場合は、買取そのものには比較的苦労しませんでした。あの敷地は、組合立中学校の敷地という大きな母体がありましたし、隣接地も農地解放された土地が多く、現金に魅力を感じて土地を手放す人が多かったものですから。ただ、明星の敷地は、もともと学校敷地として、ある方が寄付したということで、それ以外の用途に使われるのなら返すべきだという議論があり、裁判にもなりました。

聞き手 寄付された土地を明星に売却して、新しい場所に統合中学校を建てた事情はどのようなものでしたか？

中村 当時、学校を建設する場合、全面的に新しい学校を造るのと、古い学校を改築するのでは補助額が違ったのです。新しく造る方が補助額が高かったのも理由の一つでしたが、(元の場所に)企業を誘致したいという考えも、

もちろんありました。

また当時、(新中学校の建設地となった)土塔新山清水地区は比較的荒れた土地でした。一方、守谷の中心地は「かみさんちょう(上町仲町下町)」と呼ばれる地区周辺で、土塔新山清水地区は、そのかみさんちょう出身のおんさま(次三男)が耕したり、居宅などを構えたりする地区でした。近くには、合併前に1町3カ村で共同設置した伝染病隔離病舎等があったりして、辺地というイメージのある土地でした。

そこで、そういった場所をそのまま町の中に置いておくのではなく、機会があれば(その場所を新たに活用して)町全体の地域格差をなくそうという考えが、我々にはありました。

また、合併後の新庁舎問題のとき同様、新中学校を造るならその位置は既存の位置でなく、新たな場所にして欲しいという、大井沢地区代表の意向もありました。

結果的には、中学校ができてあの周辺はずいぶん変わったと思います。最近では、ここ(大柏)に新庁舎ができてこの周辺もずいぶん変わったのではないのでしょうか。

聞き手 前川製作所の敷地買収はどうだったのですか？

中村 そうですね。あその土地は、全部ではありませんが、ある個人の方の所有が多かったと思います。

前川は、当初は(進出先として)郷州原(現みずき野)に着目していたのです。

そもそも、前川がなぜ守谷に目をつけたかという点、当時の前川の会長が、建設大臣だった河野一郎さんと懇意にしており、(河野さんが)筑波学園都市の土地をヘリコプターで見に行ったときの話を聞いたそうです。会長は奈良県出身でしたが、経営的に勘が働く人だったのか、その話を聞いて茨城に目を付け、守谷に着目したと聞いています。

そうして最初は、まず郷州原に誘致しようと、町の職員が地権者の方々と積極的に交渉したのですが、理解が得られず、最終的に断られてしまいました。

そのころ私は、世田谷用賀の病院に入院していたのですが、吉田亀次郎町長や職員の皆さんが見舞いに来てくれて、前川の話は断ったと報告してくれました。

そうしたらそこへ前川の会長がやってきて、「守谷をあきらめきれません。何とかありませんか。」と言われ、立沢に目をつけることとなったのです。あそこは、一人の地権者さんがほとんどの土地を所有していましたから、その方が納得してくださるなら立地できるかもしれないと、まず説得してみようということになりました。

退院後に、そのお宅を訪問してお話を伺ったところ、何とかかなりそうだという感触を得たので、前川の誘致に本格的に取り組むことになりました。

あのころは、直前のクレノートンや明星の経緯がありますから、地権者の方々も、お金と山を比較して考えたとき、それなりの値段なら売却を考えても良いという状況ができていたのです。そこで話がまとまって、前川があそこを買ったわけですが、その後、前川はなかなか工場建設に着手しませんでした。

聞き手 確かに、(前川は) 倉庫 2 棟だけが建ったきりで、ずいぶん放っておかれたため、当時ずいぶん問題視されましたね。

中村 そうですね。最初に建った倉庫 2 棟が、今あるふれあい道路際の 2 棟だと思います。

議員さんの中には不動産をやっている方もいて、そういう方にとっては土地売買は細かく頻繁にある方が良いので、前川は土地の買い過ぎではないかとか、独り占めになるなどの反対意見が出されました。また、買った後も(なかなか工場が建たないので)前川の投資行為だなどと、我々も厳しく批判されました。

しかし現在では、当時誘致した 3 社のうち、唯一残る企業となりましたし、あれだけの規模を維持しています。

このように、企業誘致の際に地域で問題視されたのは、(買収する)土地の広さでした。しかし私は、誘致する工場は、狭い敷地一杯に工場が建っているような東京の町工場的なものではなく、工場公園的な立地が望ましいと考えていました。また、後の工業団地のような空間をとることは災害のときにも意味があると認識していましたし、将来の土地利用のためにも、同じ面積を大勢の人が細かく持っているより、少数の人の所有となっている方が交渉しやすいとも思っていました。

そのほか、当時バブルのような状況が始まっていて、零細不動産業者が町内に入りつつあり、あちらこちらにいわゆるスプロール現象が起こり始めていましたから、早めに虫食い状態を抑止する必要もあったのです。この問題は、後の公団誘致などにも関連してきます。

しかし、(そういった理解が得られなかったために)我々は当時、色々な人たちから、(企業に大きな土地を確保させると)土地の値段が上がり、その利益を特定の人が独占してしまう、と相当な批判をされましたね。

企業に土地を売った地権者の方からも、その後会ったときなどに(企業に土地を売ったのは)失敗だったと言われることがありました。企業に土地を貸すことで利益が得られるようになると、土地を売ってしまったのは失敗だったと。その後、それまでしていたお付き合いができない時期もありました。町村で仕事をしていくのは功罪があるものですね。これは仕方ないことです。

聞き手 そのころ、クレノートン、明星、前川の 3 社のほかに、市内にはどういった企業がありましたか。

中村 下新田には食品加工の冷凍工場や機械部品工場がありましたし、岩地区にも自動車部品の工場がありました。
そういった小さい工場は、周囲の奥さんなどの働き先になっていました。先ほど言った下新田の食品工場では、奥さん方がずいぶん働いていたようです。大きな冷蔵庫に入る作業は寒くて大変だったという話を聞いたこともあります。
大企業だけでなく、小さな企業も結構な雇用先になっていましたね。

聞き手 そういうことで、雇用の状況や道路の状況など、町の様子は大分変わってきたのでしょうか。

中村 交通状況については、常総線の複線化や南守谷駅建設などが進みましたし、道路では国道 294 号が砂利から舗装へ整備されました。町内道路は、積極的に側溝整備を進めました。

聞き手 それは税収が上がったからできたのですか。

中村 もちろん税収も上がったと思いますが、企業を誘致したことにより「上がった」と言えるような（税収）額までいったかは何ともいえません。それでも、クレノートンが来たときは、歓迎の騒ぎがありましたよ。商工会や何かが色々と出て、竣工のときなど大騒ぎでした。

聞き手 私は当時税務課にいましたが、税収はそれほどは上がりませんでした。（税収のうち）一番多いのは町民税でしたが、そのうちにタバコ消費税が上がってきて、町民税とトントンになったことを覚えています。

中村 確かにタバコ税は多かったですね。今ではタバコをやめましょうという時代ですが、当時は小売業者の団体があって、そこに補助金まで出して、タバコを売ってくださいという時代でした。

聞き手 3 企業を誘致できた時点で誘致条例を廃止しましたが。

中村 守谷の立地を見たとき、税金の免除までして誘致することは、もう不要だとの考えからやめたのです。

ほかに、企業誘致以外の産業振興では、農業関係で立沢地区の畑地灌漑や、守谷沼の土地改良事業もやりました。今でも碑が建っていますよね。

また、当時のことでよく覚えているのは、利根左岸問題や越流堤（*）決壊の問題です。当時は岩上二郎知事の時代でしたが、越流堤が決壊した翌日、堤防の上で地元の声聞くための集会が開かれ、ある町議会議員が知事に現状をどうしてくれるのかと問い掛けをしました。しかし、その言い方があまりに丁寧だったもので、実際にその地域に住んでいる方が見かねて知事に直談判をしました。大八洲開拓の方々があそこに移住したことを、その議員は「入れていただいた」というような言い方をしたのですが、そ

うではなくこういうところに住まわされたのだと、そこへこういう災害を受けてどうしてくれるのだと、そう言いました。

私も脇で見ていたのですが、かなり激しくやりあっていましたね。そこで、交渉の仕方や相手との心理的な駆け引きなど、色々あるものだったことを覚えています。

聞き手 それは昭和 34 年の台風 7 号（*）のときですね。
当時、大木流作地域はどこのお宅でも屋根を切って脱出できるよう、天井に鎌や田舟を置いてありました。そして、新米は絶対食べない、古米から食べる、そういう習慣になっていたほどの災害常習地でしたね。

中村 逆に、3 年に 1 度の水害なら肥沃になると言っていた方もいました。そういった方は砂防堤（*）を作るのは反対だと言っていましたね。

そういえば、農業問題では、昭和 30 年代半ばくらいまでは根切の羽中耕地の問題がありました。あそこは洪水になると水門を閉ざしてしまう。それが、よく選挙の際などに政争となりましたね。羽中をどうするこうすると言って。合併前後から昭和 30 年代半ばまで、羽中耕地問題は農業問題としてずいぶん議論されましたね。

聞き手 羽中川は流域がかなりあって、大雨が降ると流域から（水が）落ちてくるので羽中樋管を開けるのですが、（下流の）戸頭方面の利根川からも水が逆流してくるので、水が落ちきる前にすぐに閉じてしまうのです。開ける、だめだ、と昔からやっていて、今でも問題となっています。

中村 今でも樋管監視員はいるのですか？

聞き手 いますよ。昔、高野にいた樋管監視員の方は、両方から怒られるから困ったと言っていましたね。

■都市化に向けた動き

聞き手 人口推移を見ると合併直後は 1 万 2 千人でいたものが、しばらく減っていますね。それは何かあったのですか？

中村 東京勤めの人が多くなったこともありましたが、当時、守谷のおんさまたちは、柏や我孫子などへ出て行くことが多かったからではないでしょうか。守谷に来るのは旧の大井沢や大野の人たちで、旧守谷の人は、柏や我孫子へ、という流れがありました。そこで人口減退となったのでしょうか。

自治体の基本は人ですから、いかにそこに住む住民の資質を向上させるかということが、その自治体が素晴らしいものになるかどうかの基本だろうと思います。

外から来る人を妨げるのではなく歓迎する、それでいて在来特有の素晴ら

しいものを失わず、互いに交流する、そうすることで自治体の基盤を作っていくのが本来の自治体の姿だろうと思います。そういう点を大事にしながらか自治体を営んでいくことが、今後大事になるでしょうね。

聞き手 そうですね。ところで、外から人が来るという話に関連しますが、日本住宅公団（現独立行政法人都市再生機構）が来る動きは昭和30年代からあったのですか？

中村 そうですね、公団に関しては色々な情報がありました。公団理事が大井沢地区を見に来た、という話もありましたが、そのときはここまでは（宅地開発）できないと、見るだけでお帰りになったそうです。その後、公団から守谷で開発をしたいがどうでしょうと、吉田町長に問い合わせがありました。私も、今の虫食い状態が進むより公団で大規模開発した方が良いと思いましたから、誘致を始めることにしました。

まずは、通勤問題などを考慮すると（開発地区は）取手に近い方が良いでしょうと、高野周辺の向原などの南守谷地区を想定し、地元の方たちと話し合いを始めました。ところが先ほど言ったように、高野地区は軟弱野菜を中心とした質の高い農業を営んでいたもので、とんでもないと猛反発がありました。職員が各地区へ行って説明をしましたが、もう来てくれるなど、拒否反応まで出てしまいました。

そこで北（＝大井沢）はどうだ行って見たところ、最初は一部の人たちは受入れに気持ちが悪く動いていたようでしたが、高野に対抗する潜在的な意識もあって反対運動が起こり、結局のところ30年代の公団誘致は実現しませんでした。

ですから、40年代に入って、再び公団による住宅団地計画が動き始めたときは、反対運動が強かった南より、北の方から始めることになったのです。

聞き手 公団誘致の際には、特に南団地での反対運動が激しかったですね。

中村 しかし、反対していた人たちも、何年か経ってから私たちと会うと、「いや、中村さんたちはよくやってくれました」と言ってくれたりもしました。

聞き手 反対されていた方に対し、どうやって説得されたのですか？

中村 私の説得の基本は、農家の方の農地へのこだわりに対して、今の農地はあなた方のおじいちゃんやお父さんが長い間耕作した結果のものだ、これからはむしろ既存の農地にこだわらず、自分たちの力で生活の道を作るために努力すべきだというものでした。

また、粗放農業から軟弱野菜に変えたりして近代化する経済に順応したように、土地そのものも変化させ、活用させることで時代の波に乗るべきだ、という話もしましたね。

そういうとき、個人的には賛成でも、全体の雰囲気は反対ということになると言い出せないもので、見ているとこの人は（それほど反対していない）と分かりましたね。

■昭和 30 年代及び今後のまちづくりについて

聞き手 それでは、最後に、30 年代は守谷町にとってどんな時期だったのかということの中村さんにご考察いただきたいと思います。

中村 そうですね、戦後の苦しい食糧難の時代を乗り越えてたどり着いた昭和 30 年代とは、その後自分たちの生活を何とか発展させようとする立ち上がりの時代だったと思います。

各町村が企業誘致をして新しい産業を確立したり、農業基盤についても従来のような耕し方とか水の求め方ではなくて、もっと合理的に（農業を）営めるよう、作物も質の高いものが生産できるよう、発展を目指した時代でした。

特に守谷の場合は、住宅公団による宅地開発を導入し、乱開発を抑止しながらまちづくりを計画化していきました。それが、今日の守谷、住んでよかったとか、各種ランキングで上位に位置付けされる基盤の役割を果たしたのだと思います。

そういった昭和 30 年代を基礎にして今日に至るわけですが、今後は 30 年代のような荒っぽい「まちの骨格づくり」ではなく、緻密で、しかも科学的な考えによる自治体の体制あるいは構造を構築すべき時期と思います。そして、その段階へ行く初歩的な時代が 30 年代だったのかなと思います。人間と同様、幼児期、学童期など各自自治体に成長発展の区切りがあるとすれば、昭和 30 年の合併はいわば小学校から中学校へあがる段階で、平成の合併は、中学から大学まで進むレベルだったのではないのでしょうか。平成の合併時、守谷は合併しませんでした。行政的に地域の暮らしというものを考えると、今後はあらゆる面で近隣市町村と連携する仕組みやシステムを構築すべき時代になったと考えています。

今は職員も 340 人いますが、これは大変な戦力ですよ。活用の仕方によっては何でもできる規模ですね。

人口も順調に伸びて 6 万人を突破しましたが、これからは既存の市町村意識を払拭しないとイケません。東京を中心とした首都圏やつくばを軸とした衛星都市圏、そういうグループの一員としての役割を果たしていく、それが自治体の役割だと割り切るぐらいでないとイケません。

これからは、守谷だけが発展していくことはありえないですね。そういう意味での自治体の融合性が大事ですね。

聞き手 そうですね。時代は「関東州」という動きがあるくらいです。平成の合併時、水海道と伊奈と谷和原と守谷という案がありましたが、結局伊奈は谷和原と、水海道は石下と合併することになりました。

中村 我々の時代も、広域化について検討したことがありました。昭和 34 年でしたね。当時の利根、藤代、取手、守谷は、いずれも水害多発地域でしたから、そういった地域同士を道路でつなぎ、都市計画を広域的に考えていこうという作業でした。そのときは、各町村からの出向職員を取手の商工会

の事務所に集めて作業をさせました。

しかし、取手が合併の方向で動き出したため、利根町は「行政区分としては北相馬郡だが、一般の人の生活は龍ヶ崎や対岸の木下にある」と拒絶し、守谷と藤代も取手の指揮下に置かれるのは嫌だということになり、結局、その広域化を目指した作業自体が中断となりました。

そして昭和50年代に入って環境センターを中心とした常総地方広域市町村圏ができました。

この流れからいくと、(平成の大合併の時には)伊奈や谷和原と仲間になろうという考えが必要だったと思いますよ。

これからは、守谷は守谷の個体として自立すれば仲間ができますから、仲間同士連携しようという意識が必要ですね。その連携がつくば中心なのか、首都圏の末尾にいくのか、その位置は分からないけれど、いつかはきっとそうなるでしょうね。

聞き手 私は、中村さんのお話にあった広域化作業のため、取手市などに出向していた時期があり、そこで守谷という枠だけでなく、広域という視点を培えたという気持ちがします。今の職員の皆さんも、ぜひ近隣市町村と付き合いあって欲しいですね。

それでは、本日は長い時間、色々なお話をお聞かせくださいまして、本当に有難うございました。

中村 有難うございました。